

中学校社会科（歴史的分野）学習指導案

単元名

江戸時代の人々はどのような生活を送っていたのだろうか

内容のまとめ

B 近世までの日本

(3) 近世の日本 (ウ) 産業の発達と町人文化

1 単元目標

町人文化が都市を中心に形成されたことや、各地方の生活文化が生まれたことを理解し、その背景を産業の発展、貨幣経済や交通の発達と関連付けて多面的・多角的に考察することを通して、よりよい社会の実現を視野にそこので見られる課題を主体的に追究しようとする。

2 単元を通して身に付けさせたい資質・能力

武士による支配が完成し「泰平の世の中」とよばれる時代に、農業が発達し、続いて商品作物やその他の産業が発達し三都が繁栄した。さらに、交通が発達し、庶民の間にも教育が普及して文化が広がっていった。これほどまでに庶民が文化の担い手となった時代に、生徒はこれまで学習した内容との違いを感じるだろう。このような庶民の成熟が、江戸時代後半の諸改革が狙い通りにいかなかった要因になったり、その後の近代化の要因の一つになったりしている。近世の社会において、まさに現代の社会につながる仕組みや文化が生まれたということを生徒が理解できるようにしたい。

また、この単元を構成するにあたり、生徒が現在との結び付きを感じることができるよう、「双六」という題材に着目した。「産業や交通の発達」については身近な地域の特徴を生かすために東海道を描いた双六を取りあげ、「各地方の生活文化」については、横浜市内の東海道宿場町の事例を取り上げるように配慮した。さらに、街道の発達を空間的な広がりの中で捉えたり、地理的分野において学習した日本の地形に関する既習事項を働かせたりする場面を設定し、学んだことを新しい学びにいかす姿勢を生徒から引き出したい。

3 実践計画の概要

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
産業や交通の発達、教育の普及と文化の広がりなどを基に、町人文化が都市を中心に形成されたことや、各地方の生活文化が生まれたことを理解している。	産業の発達と文化の担い手に着目して、事象を相互に関連付けながら、近世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	近世の日本について、よりよい社会の実現を視野にそこので見られる課題を主体的に追究しようとしている。
・都市を中心に町人文化が形成されたことや各地方の生活文化が生まれたことを理解している。 ・空間的な広がりや地形に着目しながら、双六などの資料から様々な情報を効果的に調べまとめている。	・産業の発展、貨幣経済や交通の発達などに着目して、事象を相互に関連付けながら、当時の庶民がどのような生活をしていたのかを多面的・多角的に考察し、表現している。	・産業の発達と町人文化の形成の中で当時の庶民がどのような生活をしていたのかを、よりよい社会の実現を視野に、自分の生活と関連付けながら主体的に追究しようとしている。

(2) 本単元の位置づけ

【大単元を貫く問い】

江戸幕府が全国を統一する安定した政権を成立・維持できたのはなぜか？
また、庶民はどのような生活を送っていたのだろうか？



中単元① 身分制度の下での暮らし

【問い】江戸幕府はどのようにして全国を支配したのだろうか

中単元② 天下泰平の世の中？ **本単元**

【問い】江戸時代の人々はどのような生活を送っていたのだろうか

中単元③ 社会の変化と幕府の対策

【問い】なぜ江戸幕府には改革が必要だったのだろうか

(3) 指導と評価の計画 [5時間扱い]

(○…「評定に用いる評価」、●…「学習改善につなげる評価」)

主な学習活動と内容、主な資料（◆）と教師の支援（◇）	評価の観点			評価基準（評価方法）
	知	思	態	
【単元を貫く問い】江戸時代の人々はどのような生活を送っていたのだろうか				
1 身分制度の下での暮らし 江戸時代の身分制度について基本的な事柄を理解する。 ◆「金沢文庫址御所か谷」※1→農村の昼時の様子から、当時の農村の雰囲気を読み取る。 ◇基本的な事柄を学級全体で確認できるような場面を作る。	●		●	態) 単元を貫く問いについて今の時点での仮説を自分なりに書いている。 知) 江戸時代の身分制度についての知識をワークシートに整理してまとめている。
2 諸産業の発展と陸の道・海の道 農業の発達、商品作物やその他の産業の発達、三都の繁栄、交通が発達について、基本的な事柄を図表にまとめる。 ◆「神奈川宿模型(2000分の1)※2、 「神奈川台」※3、「洲崎明神」※4 ◇交通の発達については4次で扱うため、基本的な事柄に留める。	●			知) 諸産業の発展と交通網の発達について、諸資料から必要な情報を効果的に調べ、自分なりにわかりやすくまとめている。
3 貨幣経済の広まりと上方で栄えた町人の元禄文化 戦いのない社会において文治政治や貨幣経済が広まったことや、商人を中心とした庶民が文化の担い手になっていったことを自分の言葉でまとめる。 ◆生類憐みの令、小判各種に関する資料、井原西鶴の作品、等		●		思) 戦いのない社会が人々の行動にどのような影響を与えたのかを、多角的・多面的に捉えて自分の言葉で説明している。
4 江戸の庶民が担った化政文化 本時（2時間扱い） 化政文化の基本的な事柄を理解すると共に、双六に描かれていることを読み取り、当時の庶民がどのような生活をしてたのかを、既習事項と関連付けて、考える。 ◆「東海道木曾路新版振分道中双六」※5などの双六、木曾路（中山道）に関する資料、地図帳 ◇生徒が現在との結び付きを感じることができるよう双六を紹介したり、身近な地域の特徴を生かすために横浜市内の東海道宿場町の事例を取り上げたりするようにする。 ◇既習事項である街道の発達を空間的な広がりの中で捉えたり、日本の地形もとに考える場面を設定したりして、学んだことを新しい学びにいかす姿勢を生徒から引き出す。	○	○	○	知・思・態) 既習事項を使って、当時の庶民がどのような生活をしてたのかを、多角的・多面的に説明している。また、よりよい社会の実現を視野に、庶民の姿に自分の生活を関連付けて考えようとしている。

4 本時目標

既習事項（身分制度、産業の発展、貨幣経済、交通の発達など）を使って、江戸後期の庶民がどのような生活をしてたのかを、多角的・多面的に捉えたり、自分の生活を関連付けたりしながら、説明する。

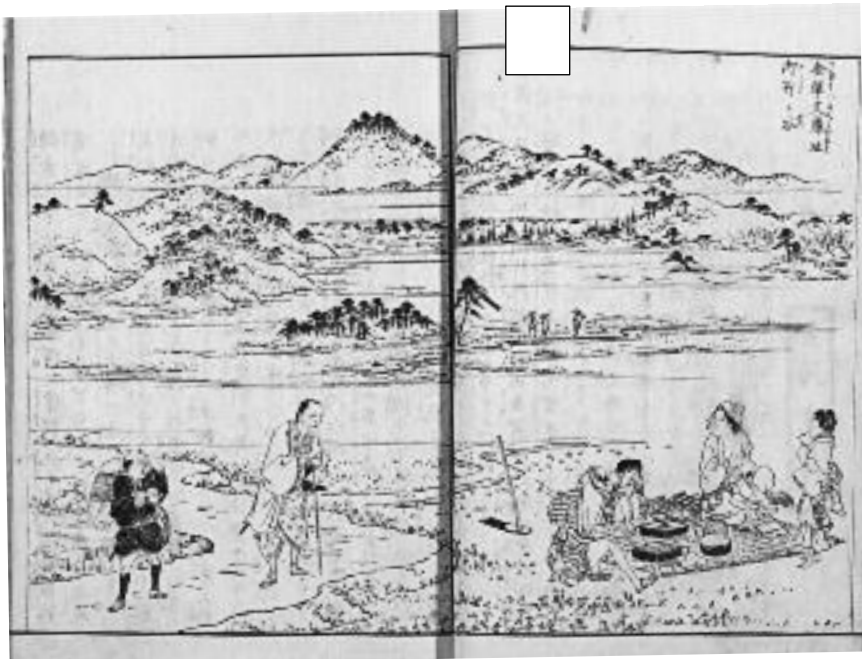
5 本時展開（2時間計画）

主な学習活動と内容	主な資料（◆）と教師の支援（◇）など
【本時の問い】江戸の庶民はどのような生活をして何を求めているのだろう ・グループごとに、様々な双六に触れる（実際に遊ぶ）ことで、当時の庶民の姿を身近に感じる。 ・どのような双六で遊んだのか、描かれていたことや面白く感じたことを、グループごとに発表してクラス全体で共有する。 【予想される生徒の反応】 S: 当時の有名な歌舞伎役者が描かれていた。 S: 出世双六は、奉公→大問屋→長者で、学問による出世は、学者や医者だった。 S: 女性の出世は、將軍の側室になることを目指していた。	◆やく者双六、出世双六（男女）、忠臣蔵双六 ◇庶民の間で流行していたものや、出世が当時は何を意味していたのかを読み取り、生徒が自分の生活と比較したり結び付きを感じたりできるような場をつくる。 ◇生徒にくずし字アプリや検索サイトを使用させ、何が描かれているのかを自由に調べてよい雰囲気をつくる。 【発問例】 T: どのような双六でしたか。また、どのようなことが描かれていましたか。 ◇既習事項（身分制度、産業の発展、貨幣経済、交通の発達など）とつなげた発言を価値づける。
・ 前回の授業内容を振り返る ・ 化政文化についての基本的な事柄をワークシートにまとめる	◆教科書、資料集 ◇文学や浮世絵、教育機関について触れる
・ 旅の様子を描く双六を読み取る 【予想される生徒の反応】 S: 鶴見の米饅頭 S: 境木の牡丹餅 S: 戸塚の焼餅 【予想される生徒の反応】 S: 東海道の方が明るい色で描かれている。 S: 東海道は名物や名所が描かれている。 S: 中山道は青くて山ばかりだね。	◆「東海道木曾路新版振分道中双六」※5 【発問例】 T: それぞれのコマには宿の名物や名所が描かれています。横浜市内では何が描かれていますか。 ◇生徒が資料を読み取る際には、端末でくずし字アプリを使用させる。 【発問例】 T: この双六は、最初にふったサイコロが奇数か偶数によって、ルートが東海道か中山道かに分かります。それぞれどのような描かれ方をされていますか。 ◇東海道と中山道のそれぞれにどのようなメリット・デメリットがあったのかを考えさせたい。

・ 次のことについて、既習事項を使いながら、自分の言葉でまとめる ① どうして旅がひろまったのか ② 人々はどのようにして旅に出たのか	◇既習事項を使って説明することを促す。 ◇自分や今の社会と似ている点や異なる点に着目させたい。
・ 次の単元の見通しをもつ	◆「改正里程賃銭東海道線路汽車旅行双録」※6 鉄道が描かれたもの。 ◆「名所名物里程明細東海道五十三次寿語録」※7 京都を振り出しに東京日本橋を上りとする。江戸時代の名残と文明開化の風俗が入り混じったもの。

6 博物館との連携

○「金沢文庫址御所か谷」※1 （※1、3、4は「江戸名所図会」より）



農村の昼時の様子

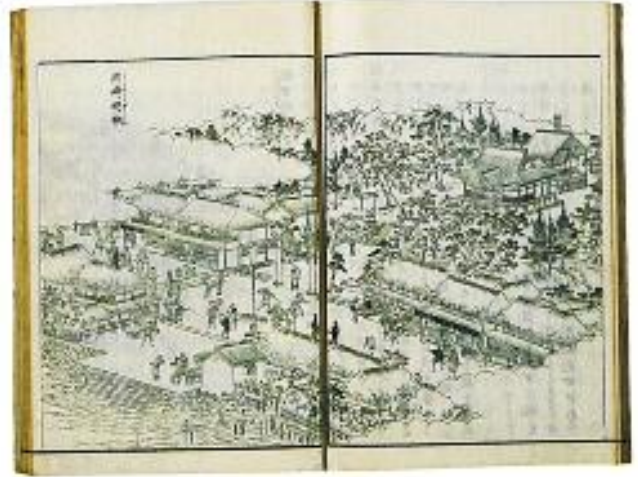
○「神奈川宿模型(2000分の1)※2 （市歴博常設展示資料）



○「神奈川台」※3

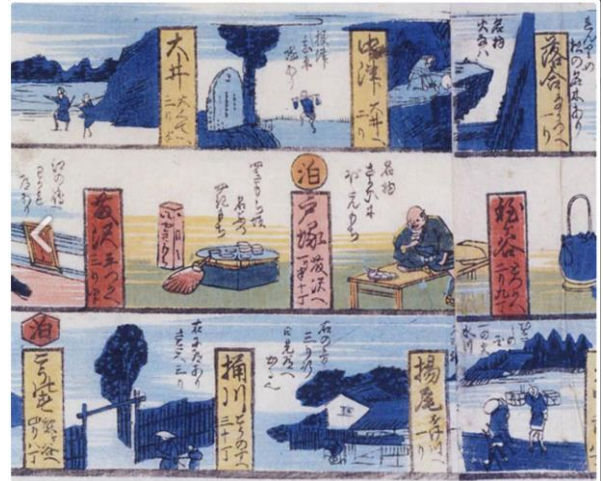


○「洲崎明神」※4

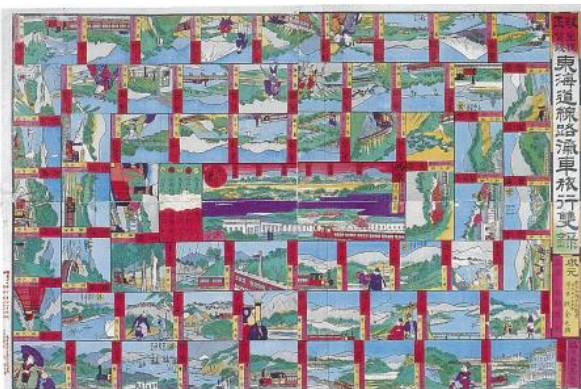


○横浜市歴史博物館「東海道木曾路新版振分道中双六」※5

江戸日本橋をふりだし、京都をあがりとする道中双六。木版刷、2枚続。版元は蔦屋吉蔵。袋付。袋には富士山と浅間山が描かれている。この双六には、東海道と木曾路（中山道）の2つのルートが存在する。ふりだしに、「丁目をふれば東海道、半目をふれば木曾海道」とあり、丁目（偶数）が出たら、2コマ目の品川から東海道へ、半目（奇数）が出たら、2コマ目の板橋から中山道へ進むしくみになっている。中山道は守山から草津で東海道と合流し、大津から京へと至る。コマにはそれぞれの宿の名物や名所が描かれる。市域では、川崎宿のコマに「名物なら茶、つるミ米まんぢう」、神奈川宿に「名物かめのこせんべい」、保土ヶ谷宿に「名物さかい木ぼたんもち」、戸塚宿に「やきもち坂名ぶつやきもち」が記される。作者は一立斎広重（初代歌川広重）、版元は蔦屋吉蔵。（横浜市歴史博物館 Web サイトより）



○「改正里程賃銭東海道線路汽車旅行双録」※6



○「名所名物里程明細東海道五十三次寿語録」※7



○双六 （国立国会図書館 Web サイト他）

- ・盤双六：白と黒の駒を多数動かして陣地を取る遊び。貴族の遊びとして 5～6 世紀ごろから流行、江戸時代には廃れていく。
- ・絵双六：主に江戸時代、庶民の娯楽として普及。

「廻り双六」はじめ。サイコロの目に沿って順番にコマを進める形式

「飛び双六」「一回休み」のマスが作られ、サイコロの目に応じて離れたマスに移動する。

⇒娯楽として発展

※子どもには難しい内容を含むものもあり、年長者と子どもが一緒に遊んだものと考えられる。

また、色鮮やかな絵双六の多くは、当時の人気絵師らによって描かれ、その美しさから遊ぶだけでなく観賞する対象ともなっていた。

→「道中双六」各地への旅行を主題としたもの。17 世紀末ごろからそう呼ばれる。

江戸時代には、交通網の整備や治安の改善などによって、旅に適した環境が整えられたが、それでも多くの人々にとって、特に遠隔地への旅は、まだ難しく、憧れの対象であった。手軽に旅の気分を味わえる遊びとして普及したのが、道中双六や名所双六。

※多くは、日本橋発の京都あがりだが、近代に近づくにつれて、逆パターンも増える。

○その他の双六のパターン

やく者双六



出世双六



商家の出世 「手代奉公」→「大問屋」 →「長者」
学問による出世は、「儒者」や「医行（いしゃ）」など

出世双六（女性版）大奥へ奉公にあがり、
将軍の側室になることを目指す



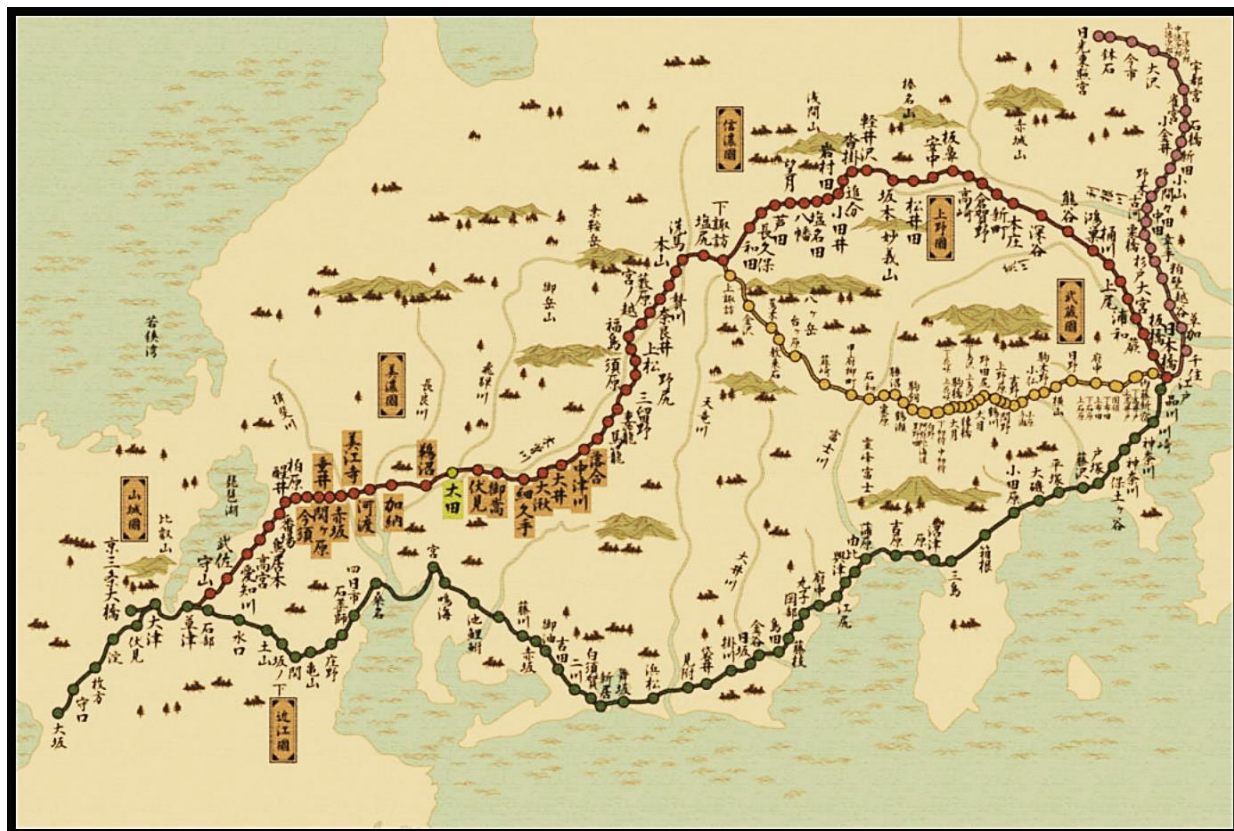
物語の登場人物の双六（忠臣蔵）



木曾路(中山道)について （太田宿中山道会館 Web サイトより）

「江戸時代、中山道は東海道と比べ、陸路が多いため渡場で止められることが少なく、安定して通ることができたので、比較的多くの旅人が往来しました。しかし、東海道と比べて伊勢湾の渡しや大井川のような大河の渡しなど危険な所が少ないとはいえ、険しい坂や激流の河川が旅人を阻みました。

また、徳川家は天皇家との外戚関係を継続させるために、皇族や公家の娘を将軍の夫人にしてきました。これらの姫君たちはいずれも中山道を通して江戸に向かいました。姫君の通行が多くあったため、中山道は姫街道とも呼ばれています。」



その他【博物館より参考事項】

- ・江戸時代の制度(ルール)として百姓(庶民)は原則耕作地を離れて、今でいう旅行は禁じられていた。寺社参詣や湯治なら OK だったことにも触れると深まる。
- ・双六は疑似旅行でもあった。参詣にかこつけて実際は観光もしており、村の人々がお伊勢参りなどの長い旅にでるのは原則農閑期の冬の間が多かった。
- ・横浜市域の庶民の旅日記では、東海道で 伊勢～高野山～金毘羅～奈良～京都～中山道～善光寺～日光～江戸～戻りのようなものがある。